

選擇本願の思想的展開

加藤 智 學

阿彌陀佛の本願は選擇攝取の誓願なることを高唱して専修念佛の正宗を弘興せられたるは法然聖人である。聖人の『選擇本願念佛集』には、其の選擇の大義が發揮詳論せられてゐる。大『無量壽經』に據りて論說せられてはゐるが、『選擇』の語は異本異譯の『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』に出づる所である。此の經をば略稱して大『阿彌陀經』と云ふ。されば『選擇集』の本願章には大『阿彌陀經』を引出して選擇の義を釋顯せられてゐる。大『阿彌陀經』に類似した經本は『無量清淨平等覺經』であつて、此の經にも亦「選擇」の語が使用せられてゐる。法然聖人が阿彌陀佛の本願を「選擇本願」と稱して一宗の大義を發揮せられたるは、大『阿彌陀經』『無量清淨平等覺經』に出づる「選擇」の語に據られたるものである。「此の中に選擇とは即ち是れ取捨の義なり」と聖人は解釋して居らるゝが、阿彌陀佛は因位に於て如何なる事を選択捨して本願を建てられたのであつたか、此の事は大『阿彌陀經』に於ては次の如くに説かれてゐる。

曇摩迦(Dharmakara 法藏)菩薩、樓夷亘羅(Lokesvarajita 世自在王)佛の經を説きたまふことはくの如くなるを聞きて、即ち大に歡喜踊躍す。其の佛、即ち二百一十億の佛國土の中の諸天人民の善惡・國土の好醜を選択し、

爲めに心中の欲願する所を選択す。樓夷亘羅佛、經を説き竟りて、曇摩迦、便ち其の心を一にして、即ち天眼を得て徹觀して、悉く自ら二百一十億の諸佛國の中の諸天人民の善惡・國土の好醜を見て、即ち心中の所願を選択し、便ち是の二十四願經を結得す。

此の經說に據れば、樓夷亘羅(世自在王)佛が、先づ二百一十億の諸佛國の中の天界人界の有情の善惡と其の依報の國土の好醜なる事相を觀じて、其の善好なるを選択し其の醜惡なるを捨捨て、曇摩迦(法藏)菩薩の爲めに、其の心に欲願すべき所のものを選択攝取して教授せられ、曇摩迦菩薩は、其の教説を聽き、精神を統一して三昧(Samadhi)を修得し、天眼を獲て、自ら悉く二百一十億の諸佛國を徹觀して、其の國中の天人の善惡と國土の好醜を見て、選取を捨して心中所欲の願事を攝取し、二十四願を建立せられたのである。『無量清淨平等覺經』に於ても亦殆ど同様に叙説せられてゐる。

法寶藏菩薩、世饒王佛の經を説きたまふことはくの如くなるを聞きて、則ち大に歡喜踊躍す。其の佛、則ち爲めに二百一十億の佛國の中の諸天人民の善惡・國土の好醜を選択し、爲めに心中の所願を選び用つて之を與ふ。世饒王佛、經を説き竟りて、法寶藏菩薩、便ち其の心を一にし、則ち天眼を得て徹觀して、悉く自ら二百一十億の諸佛國の中の諸天人民の善惡・國土の好醜を見て、則ち心の欲願する所を選んで、便ち是の二十四願經を結得す。

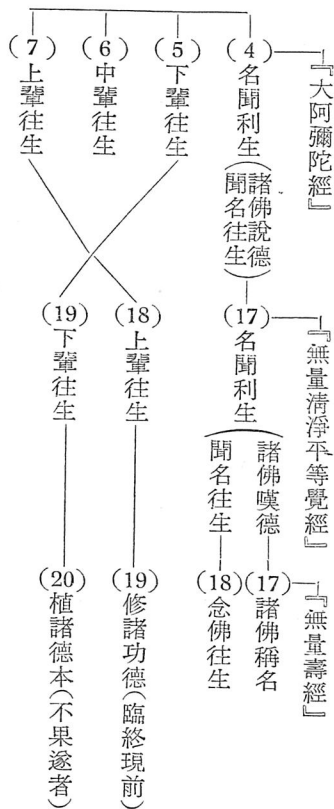
阿彌陀佛の二十四願を説ける此の兩經本の所說には頗る類似せる處があり、譯文も亦頗る類似して居る。二十四願の順序内容その他に於て大に異つてゐる處もあるが、經本の全體の上に於て類同せる章句が頗る多い。それで、同經異本の此の兩譯本の上で見ると、先づ樓夷亘羅(世饒王)佛の選擇が有つて、それから曇摩迦(法寶藏)菩薩が選擇して二

十四願を結得せられた、と云ふことに成つて居る。而して其の觀見して選擇せられたる所の者は、二百一十億の諸佛國の中の天趣人趣の善惡・國土の好醜である。佛は淨土にも出現し穢土にも出現し給ふが故に、佛の現在して說法利生したまふ國土には、嚴淨の土もあり、穢濁の土もある。淨土であつても穢土であつても佛の出現し給ふ處は佛國土である。されば今此の經本に叙説せらるゝ二百一十億の諸佛國は、其の中に清淨なる國土もあり善惡好醜の存する世界もあり、種々の佛國土を觀見して、其の善好なるを選取し其の醜惡なるを捨捨て二十四願を結得せられたのである。その選擇攝取せられたる願事は、曇摩迦菩薩が阿彌陀佛と成らせたまふ時に莊嚴成就せらるべき佛國土の正報依報の勝妙なる事義に外ならぬ。かゝる意味に於て此等の經本に説かるゝ阿彌陀佛の本願は選擇の本願であつた。

二

大『阿彌陀經』・『無量清淨平等覺經』に叙説せらるゝ樓夷亘羅佛の選擇・曇摩迦菩薩の選擇は、如上の意義なるが故に、未だ衆生往生の生因に就ての選擇は思想せられて居ないやうである。二百一十億の諸佛の國土へ往生する生因に就ても觀察する所ありて選取選捨せられし事義があつたかも知れぬが、さうした事は此等の經本には説かれて居ない。大『阿彌陀經』の二十四願に於ては、衆生の往生を誓願せられたるは、第四・第五・第六・第七の四願であるが、其の第四願の後半の聞名慈喜往生を念佛往生に照合して理解することができないこともないけれども、第五願は聞名作善往生、第六願・第七願はそれよりも高い作善往生を誓願せられたるものにて、此等の衆生往生の因果を誓願せる總ての願事を通觀したる上にては、往生の因行に選擇せられたる一行ありとは想はれず、此等の誓願の成就の文である三輩往生の經説を見るも、種々作善の往生を説けるものにて、選取せられたる行業ありとは思考するを得ず、要す

るに此等經本の所説の當相は念佛往生を含める諸行往生にして、往因の上には選擇取捨の義趣無かりしものと想はる。『無量清淨平等覺經』の二十四願に於ては、第十七・第十八・第十九の誓願に、衆生往生の因果が誓はれるが、中輩往生の一願を缺失し、願事は大『阿彌陀經』の所説と略ほ同様である。願成就の三輩往生の文も亦頗る類同せるものである。かくて此の二十四願の順序は『無量壽經』の四十八願の前半の順序に略ほ一致するものにて、『無量壽經』の四十八願の第十七・第十八・第十九・第二十の願文は、『無量清淨平等覺經』の第十七・第十八・第十九の願文より展化開變したるものと觀ることが出来る。其の關係は次の如くである。



衆生往生の因果を誓言し生因を顯示したる本願は、斯くの如く展化して、『無量壽經』の四十八願の第十七・第十八・第十九・第二十の誓願と成つた。名聞利生の願の前半の諸佛稱嘆より分離したる後半の聞名往生は、獨立して第十八の念佛往生の誓願と成り、「至心に信樂して我が國に生れんと欲ひて乃至十念せん」と聞名念佛の信行を開示し、第十

九・第二十の修諸功德・植諸德本に對照して、特殊の意義ある生因の誓約と拜し得る願文と成つた。かくて此の『無量壽經』の第十八願は道輝禪師・善導大師によりて加減せられ、「乃至十念」は「稱我名字」と説示せらるゝに至り、稱名念佛の一行によりて報土に往生することを得る易行易往の「念佛往生」を誓約せられたる本願と拜することとなり、遂に法然聖人に至りて此の願文の上に於ても選取選捨の義あることを發揮し、餘行を選び捨て、念佛の一行を選び取つて誓願せられしものとして、生因に就て選擇本願の大義を宣顯せらるゝに至つた。

三

『無量壽經』の第十八の願文に據りて法然聖人は「選擇本願念佛」の大義を發揮宣顯せられたのであるが、その「選擇」の語は大『阿彌陀經』より採られたものであつた。然るに彼の經本に於ける「選擇」は佛土の正報依報の善惡好醜を選取選捨する意味の「選擇」であつて、往生の因行に就て選擇する旨趣を説かれたものでは無かつた。さるほどに、四十八願を説ける『無量壽經』の説相はどうかと云ふに、此の經本には「選擇」といふ譯語は無く、又その經説の當相には衆生往生の因行に就て選取選捨せられし事義は叙説せられて居ない。五劫に思惟して莊嚴佛國の清淨の行を攝取し給ひしことが説かれてゐて、彼の大『阿彌陀經』の説相とは聊か異つて居る。即ち次の如くに叙説せられてゐる。

是に於て、世自在王佛、即ち爲めに廣く二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡・國土の龜妙を説きて、其の心願に應じて悉く現じて之を與へたまふ。時に彼の比丘、佛の所説の嚴淨の國土を聞きて、皆悉く覩見して、無上殊勝の願を超發せり。其の心、寂靜にして、志、著する所なく、一切の世間に能く及ぶ者なし。五劫を具足して莊嚴佛國の清淨の行を思惟し攝取す。

斯くの如く、此の經本には、世自在王佛の選擇は説かれて居ない。大『阿彌陀經』・『無量清淨平等覺經』には、樓婁亘羅(世饒王)佛が選擇して教授せられたことになつてゐるが、此の『無量壽經』には、彼の佛の選擇を説かず、佛は二百一十億の諸佛國の天と人との善惡・其等の國土の鹿妙を叙説して、法藏比丘の心願に應じて、覩見せんと欲する所のものを悉く現じて見せて下されたと、説かれてゐる。そこで法藏比丘は、佛の所説を聞き、佛の所現の諸佛國土を見て、無上殊勝の願を起發せられたと、説かれてゐるから、「選擇」の語は使用せられて居ないけれども、法藏比丘が其の所聞所見に就て選擇して殊勝の大願を建立せられたことが思想せらるゝ。此の經説に於ては、世自在王佛の所説は「二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡・國土の鹿妙」とあるから、清淨の土も不淨の土も説示せられたものと見ねばならぬが、法藏比丘の所聞は「嚴淨の國土」と云はれてゐるから、清淨なる佛土のみのやうに想はれて、所説と所聞に相違を感ずることであるが、これは、佛は二百一十億の淨不淨の佛土を悉く説示せられ、法藏比丘は其等を聽聞して、その覩見し選擇せんと欲する所は淨土の莊嚴なるが故に、其の心願に應じて現じて教授せられたるものは清淨なる佛土の徳相であつたであらうから、其の所聞所見の淨土の功德莊嚴に於て更に選擇攝取する所ありて無上殊勝の願を起發せられしと拜すべきである。かくて此の經本には「選擇」の語は無いが、その義意は叙説せられてゐる。而して其の選擇せられたることを云ふのに「攝取」の語が使用せられてゐる。法然聖人は『選擇集』の本願章に「此の中に選擇とは即ち是れ取捨の義なり」「選擇と攝取と其の言異なりと雖も其の意是れ同じ」と解釋して居らるゝ。即ち「選擇」には選擇取捨の義あり、而して其の選擇の義意が「攝取」の語によりて顯されてゐるのである。ところが、此の『無量壽經』に於て「攝取」の語を使用せる處には、佛國土の嚴淨の事を攝取すとは説かれて無く、「莊嚴佛國の清淨の行を攝取す」

「二百一十億の諸佛妙土の清淨の行を攝取す」我已に莊嚴佛土の清淨の行を攝取す」など、云はれてゐる。かゝる説は此の經本のみに見る所である。

四

「莊嚴佛國の清淨の行を攝取す」とは如何なる事であらうか。法藏比丘は、二百一十億の諸佛國土の正報依報の善惡龜妙を覩見し、その善妙なるものを選択し、その龜惡なるものを選択して、最勝殊妙の淨土を莊嚴して衆生を迎へ取つて必ず滅度に至らしめんと欲する大誓願を超發し、その淨佛國土・成就衆生(佛國土を淨めて、衆生を成就する)の大願を成滿せんが爲に學修すべき所の清淨の行を攝取せられた。清淨莊嚴の佛國土を嚴成せんが爲には、甚深の般若波羅蜜を學習し、清淨眞實の行、即ち無所得の諸波羅蜜を修行せなければならぬ。されば法藏菩薩は五劫に思惟して莊嚴佛國の清淨の行を攝取せられ、それより世自在王佛の所に詣で、其の願波羅蜜(四十八の大願)を告白せられたのである。淨佛國土・成就衆生の願行は、『摩訶般若波羅蜜經』の「夢行品」「淨佛國土品」等に廣説せられてゐる。『小品般若經』十七の「夢行品」の所説は次の如くである。

佛、須菩提(Sumati)に告げたまはく。菩薩摩訶薩ありて、檀那波羅蜜(Dāna-Dāraṇīya)を行ずる時、若し衆生の飢寒凍餓し衣服弊壞せるを見れば、菩薩摩訶薩は當に是の願を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、檀那(布施)波羅蜜を行じ、我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、我が國土の衆生をして是くの如き事なく、衣服・飲食・資生の具、當に四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天の如くならしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く檀那波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。復次に。須菩提。菩薩摩訶薩

は、尸羅波羅蜜 (Sīlāparāṃsī) を行する時、衆生、殺生し、乃至、邪見にして、短壽、多病、顔色好からず、威徳あること無く、貧にして財物に乏く、下賤の家に生じて形殘醜陋なるを見れば、當に是の願を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、尸羅(持戒)波羅蜜を行じ、我、佛を得る時、我が國土の衆生をして是くの如き事無からしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く尸羅波羅蜜を具足し、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。一復次に。須菩提。菩薩摩訶薩は、六波羅蜜を行する時、衆生の三聚、一には必正聚(必ず涅槃に入る)二には必邪聚(必ず惡道に入る)三には不定聚に住するを見て、當に是の願を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛を得る時、我が國土の衆生をして邪聚なく乃至その名も無からしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。復次に。須菩提。菩薩摩訶薩は、六波羅蜜を行する時、地獄の中の衆生・畜生・餓鬼の中の衆生を見て、當に是の願を作すべし、我、爾所の時に隨ひ、六波羅蜜を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、我、佛を得る時、我が國土の衆生をして邪聚なく乃至その名も無からしめんと。須菩提。菩薩摩訶薩は、是くの如き行を作して、能く六波羅蜜を具足し、一切種智に近づく。一

佛國土を淨めて衆生を成就せんが爲には、菩薩摩訶薩は、斯くの如く願じて諸の波羅蜜(到彼岸)の清淨なる行を修するのである。有所得の行は不清淨にして波羅蜜に非ず。施者を見、受者を見、施物を見、果報を見る、有所得の不清淨なる布施は、布施波羅蜜に非ず。施者を見ず、受者を見ず、施物を見ず、果報を見ざる、無所得の清淨なる布施は、布施波羅蜜である。布施を行じて施相を見ず、持戒を行じて戒相を見ず、忍辱を行じて忍辱相を見ざる、無所得の清

淨行を修するに非ずんば、阿耨多羅三藐三菩提に近づくことはできない。又かゝる無行の行、無作の作である諸波羅蜜の清淨なる願行を以てせずんば、佛國土を淨め衆生を成就することはできない。かゝる修行を「大莊嚴」と云ふ。『無量壽經』には、法藏菩薩の不可思議兆載永劫の修行を叙するに、「大莊嚴を以て衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空・無相・無願の法に住して、作無く起無く、法は化の如しと觀ず。——自ら六波羅蜜を行じ、人を教へて行ぜしむ」等と説かれてゐる。是れ即ち佛國土を淨めて衆生を成就する「莊嚴佛國の清淨の行」である。法藏比丘は、五劫に思惟して、莊嚴佛國の清淨の行を攝取せられた。有所得の不清淨なる行を選び捨て、無所得の清淨なる行を選び取られたと解すれば、「攝取」の語に選擇の義ありと拜することができる。かくて又四十八の大願を超發せられしことも、淨佛國土・成就衆生の清淨行であり、願波羅蜜であるから、法藏比丘は、佛所に詣で、「世尊。我、已に莊嚴佛土の清淨の行を攝取せり」と白言し、佛は比丘に「汝今説く可し」と告命し、そこで比丘は「聽察を垂れたまへ」と申して四十八の大願を陳述せられた。されば五劫に思惟して攝取せられたる「莊嚴佛國の清淨の行」なるものは四十八の誓願として告白せられたわけである。五劫思惟の本願、兆載永劫の修行、それら清淨眞實の願行の總てが「莊嚴佛國の清淨の行」である。かくて『無量壽經』の所説に於ては、「選擇」の語は無いけれども其の義意あり、法藏比丘は二百一十億の諸佛の國土を親見して無上殊勝の願を超發し、五劫に思惟して莊嚴佛國の清淨の行を攝取せられたと、叙説せられてゐるのである。

五

『無量壽經』に最も類似せる經本は、『大寶積經』のなかに編入せられたる『無量壽如來會』である。此の經本にも四十

八の誓願が説かれてゐる。然るに此の經本には彼の「莊嚴佛國の清淨の行を攝取す」と云へるが如き言句が存在せない。「法藏」を「法處」と異譯して、法處比丘が二十一億の諸佛國土の嚴淨の事を皆悉く攝受して彼の諸佛國に超過する佛國を圓成すべく殊勝の誓願を建てられたることが叙説せられてゐる。即ち次の如くに説かれてゐるのである。

爾の時、世尊、其が爲に廣く二十一億の清淨の佛土の具足莊嚴を説きたまひし時、千億歳を経たりき。阿難。法處比丘は、彼の二十一億の諸佛土の中に於ける所有の嚴淨の事、悉く皆攝受す。既に攝受し已りて、五劫を満足して思惟し修習す。——阿難。彼の二十一俱胝 (Koṭi) の佛刹、法處比丘所攝の佛國は彼に超過す。

此の經本にては、二百一十億は二十一億と爲され、その二十一億の佛國土は清淨の佛土であつて、大『阿彌陀經』や『無量壽經』の如くに善惡好醜ありと説けること無く、法處比丘は彼の二十一億の諸佛國の中のあらゆる嚴淨の事を悉く攝受して、彼の諸佛國に超過する勝妙の淨土を莊嚴すべく誓願せられたと、説かれてゐるのである。されば此の「攝受」の語に選擇取捨の義意は無いやうである。二百一十億の諸佛國に善惡好醜の事ありとしてこそ、醜惡なるものを選び捨て、善好なるものを選び取るといふ選擇取捨が爲さるゝことであるが、此の經本の所説の如くに二十一億の諸佛國が皆悉く淨土であるとすれば、選擇取捨せず、其等淨土の勝妙の事を攝受して更に勝れたる佛土を圓成すべく志願せられたと、叙説せねばならぬことになる。清淨なる佛土の中にも鹿妙の程度があり種々異同の事ありとして思考すれば、二十一億の淨土を觀見して其の中の最も勝れたる事を選取せられたものであると想ふこともできるから、さうも觀るならば、此の「攝受」に選擇の義ありと云へないこともないが、大『阿彌陀經』『無量清淨平等覺經』に説ける

が如き善惡好醜を選擇選捨したと云ふ意味の「選擇」は、此の經本には説かれてゐないものと、思想せざるを得ない。かくて亦此の經本に類似せる一本である尼波羅傳來の梵本『Sukhāvatīvyūha 樂有莊嚴』には、次の如くに叙説せられてゐる。

彼の世自在王如來應供正等覺者は、彼の比丘の志樂を知り已りて、義利を欲し、利益を求め、憐哀悲愍し、佛眼の不斷なるが爲に、諸の有情に於て大悲を生じて、滿俱胝年間、八十一百千俱胝尼由陀の諸佛の佛國の嚴飾莊嚴の成滿と並に相と略標と廣釋とを教示したまへり。―彼の法藏比丘は、彼等八十一百千俱胝尼由他の諸佛の佛國の功德の嚴飾莊嚴の一切の成滿を一佛國に攝取して、頭を以て世尊世自在王如來の兩足を禮し、右邊し已りて、彼の世尊の所より退きたり。又更に五劫の間に、廣大にして上妙なる、十方の一切の世間に會て現れたること無き、佛國の功德の嚴飾莊嚴の成滿を、攝取し已りて、廣大殊勝の願を發起せり。是くの如く。阿難陀。比丘は、彼の世尊世自在王如來によりて説かれたる彼等八十一百千俱胝尼由他の諸佛國の成滿よりも、なほ八十一倍、殊勝、微妙、無量なる佛國の成滿を、攝取せり。

西藏譯本の『聖無量光莊嚴大乘經』も、宋譯の『大乘無量壽莊嚴經』も、大概またこれに類似した説相になつてゐる。それで此等の經本の所説には「選擇」の語は無く亦その義意も明了に顯示せられて居ない。世自在王佛が説示せられた二百一十億の(或は二十一億、或は八十一百千俱胝尼由他、或は八十四百千俱胝那由他など、説かれたる)諸佛國は、其の中に清淨の國土あり又不淨の土もありて、其等の國土に存在する諸天諸人に善なる者あり惡なる者あり、國土の事相にも好きもの醜きもの鹿なるもの妙なるもの有りとして、叙述せられたる經説と、其の諸佛國のすべてを清淨なる

勝妙の國土として叙述せられたる經説と、兩様の異説が出来てゐて、前者には「選擇」の語あり、その語は無くとも其の義意は明了に窺ひ得ることであるが、後者に於ては「攝取」とか「攝受」とかと云ふ譯語が使用せられてゐて、選擇取捨の義意を述説せず、たとひ其の義意ありとするも頗る不明了であつて、選擇の義なしと見て置いてもよいかと想はるゝ。ところが、魏譯本の『無量壽經』だけには、此の兩様の説相が出て居るので、前者から後者に移る中間の過渡期の經本かと眺めらるゝものである。即ち初には大『阿彌陀經』など、同じく「世自在王佛、即ち爲に廣く二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡・國土の龜妙を説く」とありて、其の次後には「佛の所説の嚴淨の國土」「二百一十億の諸佛の妙土」など、云ふ言句あり、兩様に並説せられてゐる。かくて「選擇」の語は無く「攝取」の語が使用せられてゐるが、然し前者の文義から推想して選擇の義意ありと理解すべきである。されば大『無量壽經』の現存せる諸本のうち、大『阿彌陀經』・「無量清淨平等覺經」・「無量壽經」には、前者の説相あり、『無量壽經』・「無量壽如來會」・「樂有莊嚴」・「聖無量光莊嚴大乘經」・「大乘無量壽莊嚴經」には、後者の説相があり、従つて、阿彌陀佛の本願が「選擇本願」であるといふ義趣は、古經本である大『阿彌陀經』・「無量清淨平等覺經」・「無量壽經」に據つて、明了に認識し得るのである。然るに、其の選擇は、前述の如く、佛國土の正報依報に就ての選擇であつて、衆生往生の因行に關する選擇は、經説の當相に於ては之を見出し難い。「選擇本願の念佛」と云ふ一宗の大義は、法然聖人の御發揮に待たなければならぬ事である。

六

大『無量壽經』は誦傳の間に幾多の異本を生じ、現存せる者だけでも七種の異本が傳はつてゐる。龍樹菩薩所覽の大

『無量壽經』は、なほ此のほかの一本であつたやうに想はるゝ。『十住毗婆沙論』の「易行品」に出されてある百七佛の尊號が尼波羅傳來の『樂有莊嚴經』に説かれてゐる諸佛名に頗る類似せることから考察すれば、龍樹菩薩所覽の大『無量壽經』は、『樂有莊嚴經』に類似したる一種の異本であつたのであらうと想はるゝ、さうでもあつたとすれば、世自在王佛の教示せられたる諸佛國は、前述二様の説相のうち後者の説相に成つて居る一本を誦覽せられたであらうと考へねばならぬ。『大智度論』五十に引出せられたる所のものを見ると、やはりさう成つて居る。

菩薩あり、佛、將るて十方に至り、清淨世界を示したまふに、淨國の相を取りて自ら願行を作す。世自在王佛の法積比丘を將るて十方に至り清淨世界を示したまひしが如し。

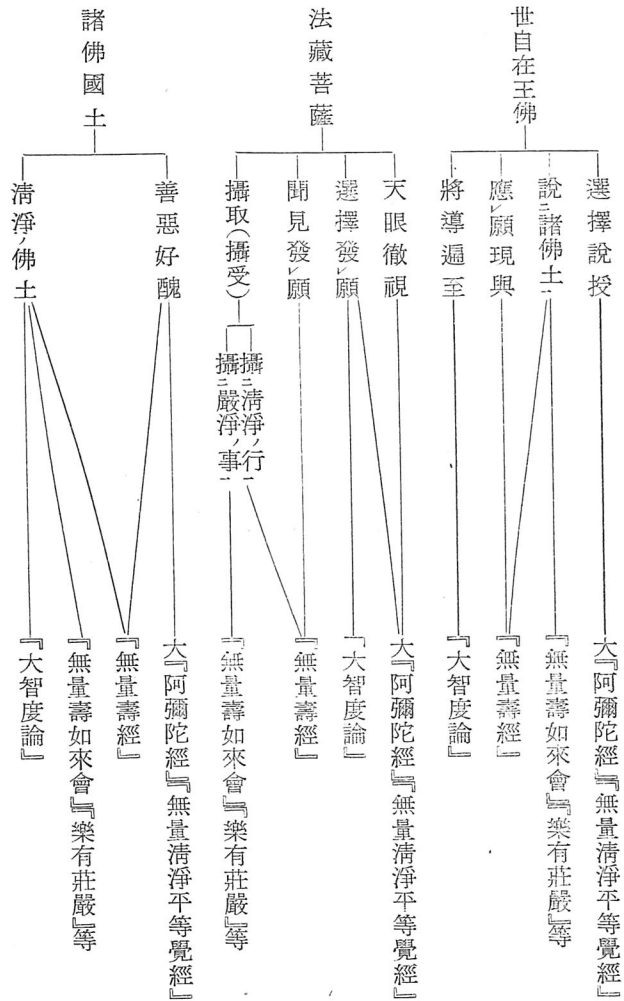
Dharmakāra は法藏とも法積とも譯す。世自在王佛が法積比丘に教示せられたる十方の諸佛國土は清淨なる世界であつたこととして記叙せられてゐる。されば「淨國の相を取りて自ら願行を作す」と、嚴淨の事相を攝取して誓願を發すことが論ぜられてゐる。さるほどに、龍樹大士は、此の攝取に選擇の義ありと思想して、「攝取」と云ふ處に「選擇」の語を使用せられた。即ち『大智度論』三十八には次の如き言句がある。

阿彌陀佛の如きは、先世の時、法藏比丘と作りたまひしに、(世自在王)佛、將導して、遍く十方に至りて清淨の國を示し、淨妙の國を選擇せしめたまひき、以て自ら其の國を莊嚴したまへり。

此の説相は、古經本の世自在王佛の選擇を説けるにも頗る似かよへる記述である。或は龍樹大士は大『無量壽經』の古本をも誦讀せられしが故ならんか。されど世自在王佛の教示せられし諸佛土は清淨世界なりと記叙せらるゝが故に、此の「選擇」は、諸の淨土の事相を觀見して其の中にて選擇取捨せられしものと理解せなければならぬ。淨土のなかに

も種々その淨妙の程度の相異があるから、其の中で最も勝妙なる事相を選取せられたものであると解すべきであらう。大『無量壽經』の諸本に於ては、二様の説相あり、前述の如く、其の後者の説相は、世自在王佛の教示せられたる諸佛國を悉く淨土なりとして法藏比丘は其の嚴淨の事相を攝受して發願せられたと成つて居る。かゝる叙説の上には、「選擇」の語は無く、その義も無いやうにも想はるゝのであるが、龍樹大士の『大智度論』の論說に至りて、かの後者の説相の上に「選擇」の語を出し其の義趣を明示せられたことは、頗る注意すべき事柄である。

猶ほ又茲に注意すべき事は、此の『大智度論』の所說に據れば、世自在王佛が法藏比丘を將ゐて遍く十方に至りて清淨世界を教示して見せしめられたと成つて居る。かゝる説相は『無量壽經』の現存の諸本の何れにも見出し得ないものである。大『阿彌陀經』や『無量清淨平等覺經』では、世自在王佛が選擇して教授し、法藏菩薩が天眼を得て徹見して所願を選ばれたと、叙説せられてゐる。『無量壽經』にては、世自在王佛が諸佛國土の事相を説き示して心願に應じて現じて與へられ、法藏比丘は其を聞き其を見て發願せられたと、成されてゐる。それから『無量壽如來會』や『樂有莊嚴經』などになると、世自在王佛は諸佛の淨土を説き、法藏比丘は其を聞いて嚴淨の事を攝受して殊勝の誓願を發起せられたと、成つてゐて、諸佛土を親見せられた事が消されてゐる。されば今、此等の經論所說の同異を圖表すれば、左の如くである。



斯くの如く經論の上に種々の異説が叙傳せられてゐる。そのなかにて「選擇」の語の出づるは、大『阿彌陀經』と『無量清淨平等覺經』と『大智度論』とである。かくて世自在王佛が二百一十億の諸佛國土の諸天諸人の善惡・國土の好醜を説き授け給ひたるを、法藏菩薩が聞いて親見して殊勝の誓願を發されたることを叙説せるは、大『阿彌陀經』と『無量清淨平等覺經』と『無量壽經』とである。『無量壽經』には「選擇」の語は無いけれども、其の義意は有るものと窺はるゝ。而

して此の「選擇」は、此等經説の當相としては、諸佛國土の正報依報の善惡好醜を選擇選擇して淨佛國土の誓願を建てられたるに外ならない。古經本にありては、斯うした意味の阿彌陀佛の「選擇本願」が叙説せられてゐたのであつた。

七

上來述説せるが如く、「選擇」の語ありて其の義趣を明了に説示せるは、大『無量壽經』の諸本のなかの最も古い經本であらうと想はるゝ、大『阿彌陀經』と『無量清淨平等覺經』とである。然し此の經本の所説の當相にては、衆生往生の因行に就て、念佛の一行を選擇して餘行を選擇せられたる「選擇」ありとは、觀想し難いものがある。魏譯本の『無量壽經』に於ても、四十八願の中の第十八・第十九・第二十の誓願を、聯結して眺めてゐたでは、生因に就て選擇の義旨ありとは、思想し難いであらう。然し此の經本に於ては、彼の二十四願を説ける經本とは異なり、念佛往生の願事を別説して第十八の誓願を成立せしめてゐる。若し此の一願の上に於てのみ選擇の義を論ずるならば、生因に就て選擇し棄して念佛の一行を取つて本願と爲されたと拜し得るのである。さりながら、此の誓願と同位に置いて次の第十九第二十の願を眺めたり、第十九願を最上の往生の因果を誓へるものと思ふたりして、此等の願文を誦讀するならば、念佛の一行を選擇せられたとのみ觀取する能はず、修諸功德・植諸徳本も亦第十九・第二十の願事であつて、選擇せられたる生因と眺められるわけであるから、諸行本願義の如き思想も起つてくることにも成る。されば、古來、『無量壽經』を誦讀せられたる多くの諸師、阿彌陀佛の本願に選擇の義意ありと思想せられたとしても、衆生往生の因行に就て選擇の大義あることを思想し論顯せられたる人は無かつた。然るに法然聖人は、善導大師の釋義に依り、四十八願の中特に第十八の念佛往生の誓願を尊重し、「本願の王」と稱して、四十八願を該攝して此の一願に據つて選擇廢立

の大義を論顯し、專修念佛の淨土眞宗を興行せらるゝに至つた。聖人は、第十八の念佛往生の願を「正生因の願」、餘の四十七願を「欣慕の願」と眺められた。かくて正生因の願は本願の本意であると唱道せられた。(此の事、行觀上人の『選擇集秘鈔』二に記叙せらる。)偏に善導一師に依る」と宣言せられたる法然聖人は、善導流の專修念佛の一宗を我が日本に弘興せんが爲に『選擇本願念佛集』を撰作せられた。善導大師が一願に該攝して阿彌陀佛の本願を宣顯し、佛願に順するが故に稱名念佛は正定の業なりと説示して、『觀無量壽經』の疏釋に於て流通廢立の義趣を發揮せられた、其の專修念佛の宗要を傳承せられた法然聖人であるから、聖人は、佛の本願を仰信して、大『阿彌陀經』の「選擇」の語に着眼し、經の微意を顯彰し、其の選擇の義趣を特に第十八願の上に觀想して「選擇本願念佛」の大義を發揮宣顯せらるゝに至つた。されば『選擇本願念佛集』の本願章には、『無量壽經』・大『阿彌陀經』を引出して、次の如くに論宣せられてゐる。

此の中に「選擇」とは即ち是れ取捨の義なり。謂はく、二百一十億の諸佛の淨土の中に於て、人天の惡を捨て、人天の善を取り、國土の醜を捨て、國土の好を取るなり。大『阿彌陀經』の選擇の義、是くの如し。雙卷經(『無量壽經』)の意、また選擇の義あり。謂はく、「二百一十億の諸佛の妙土の清淨の行を攝取す」と云へる是なり。「選擇」と「攝取」と、其の言は異なりと雖も、其の意は是れ同じ。然れば不清淨の行を捨て、清淨の行を取るなり。上の「天人の善惡・國土の鹿妙」其の義また然り、之に準じて應に知るべし。

それ四十八願に約して一往各「選擇」「攝取」の義を論ずれば、第一「無三惡趣の願」とは、親見する所の二百一十億の土の中に於て、或は三惡趣あるの國土あり、或は三惡趣なきの國土あり、即ち其の三惡趣ある鹿惡の國土を選

び捨て、其の三惡趣なき善妙の國土を選び取る、故に「選擇」と云ふなり。第二「不更惡趣の願」とは、彼の諸佛土の中に於て、或は縱ひ國中に三惡道なしと雖も、其の國の人天、壽終の後、其の國より去りて、復三惡道に更る、の土あり、或は惡道に更らざるの土あり、即ち其の惡道に更る龜惡の國土を選び捨て、其の惡道に更らざる善妙の國土を選び取る、故に「選擇」と云ふなり。——第十八「念佛往生の願」とは、彼の諸佛土の中に於て、或は布施を以て往生の行と爲すの土あり、或は持戒を以て往生の行と爲すの土あり、或は忍辱を以て往生の行と爲すの土あり、或は塔像を起立し沙門に飯食せしめ及び父母に孝養し師長に奉事する等の種々の行を以て各、往生の行と爲すの國土等あり、或は専ら其の國の佛の名を稱ふるを往生の行と爲すの土あり。——是くの如く往生の行は種々不同にして、具に述べ可らざるなり。即ち今、前の布施・持戒・乃至・父母に孝養する等の諸行を選び捨て、専ら佛號を稱ふるを選び取る、故に「選擇」と云ふなり。——自餘の諸願は之に準じて應に知るべし。

斯くの如く法然聖人は經の微意を探り佛願の深旨を味得して「正生因の願」たる第十八の「念佛往生の願」の上に選擇攝取の義あることを力説せられた。かくて「弘願の念佛」と謂はれたる稱念佛名の大行は「選擇本願の念佛」と呼稱せらるゝに至つた。けに聖人一代の勸化は選擇本願の念佛を弘興して淨土の眞宗を開宣するにあつた。されば眞宗の大祖親鸞聖人は、

智慧光のちからより

本師源空あらはれて

淨土眞宗をひらきつゝ

選擇本願のべたまふ。

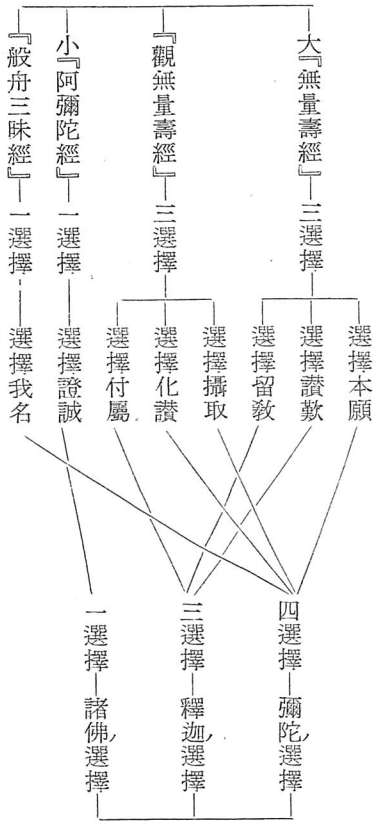
善導源信すゝむとも

本師源空ひろめずば

片州濁世のともがらは

いかでか眞宗をさとらまし。

と『高僧和讃』に嘆稱せられてゐる。第十八の念佛往生の願に於て選擇の大義を宣顯せられたといふことは、専修念佛の一宗を開興せらるゝ根基と成つたものである。『選擇本願念佛集』は此の義を宣顯せんが爲の大著であつた。されば本願章に於て先づ選擇本願の義趣を論宣し、已下十四章に互り、大『無量壽經』・『觀無量壽經』・『阿彌陀經』の所説に據り専修念佛の宗義を證成せられた。一部十六章の初の二章には聖淨二門の教相と専修正行の宗義を宣顯し、本願章已下の十四章には淨土三經の所説に據つて念佛爲本の宗義を論證せられてゐる。かくて最後の私釋に其の要義を論結して、「凡そ三經の意を案するに、諸行の中に、念佛を選擇して、以て旨歸と爲す」と云つて、三經及び『般舟三昧經』の所説に據つて八選擇を叙宣せられた。即ち其の義目を列記すれば次の如くである。



選擇本願の念佛は、晉に本願に於けるのみならず、讚歎に於て、攝取に於て、證誠に於て、彌陀・釋迦・諸佛は、皆も

選擇本願の思想的展開

ろとも、稱名念佛を選擇して、之を攝取し之を讚歎し之を證誠せられた、といふことが思想せられて、斯かる八選擇の義が宣顯せらるゝに至つた。今は此等の義相に就て詳論することを避ける。

淨土眞宗の大祖親鸞聖人は、法然聖人によりて開宣せられたる一宗の大義を更に鮮細に顯彰せられた。『教行信證』の行の卷には「淨土眞實之行・選擇本願之行」と標舉して、無礙光如來の名を稱する「大行」を宣顯し、第十七願をば「選擇稱名の願」と名け、第十八願をば別して「選擇本願」と呼稱し、彼の八選擇の旨趣を稟承して、『愚禿鈔』上には、大『無量壽經』に法藏菩薩の選擇（選擇本願・選擇淨土・選擇攝生・選擇證果）世饒王佛の選擇（選擇本願・選擇淨土・選擇讚嘆・選擇證成）釋迦如來の選擇（選擇彌勒付屬）あり、『觀無量壽經』に釋迦如來の選擇（選擇功德・選擇攝取・選擇讚嘆・選擇護念・選擇阿難付屬）あり、韋提夫人の選擇（選擇淨土・選擇淨土機）あり、小『阿彌陀經』に勸信・證成・護念・讚嘆・難易・等ありとして、義目を列して選擇の旨趣を發揮せられてゐる。此等の義趣に就ては更に稿を改めて研鑽せなければならぬ。